

「葛藤」で見る文学と映画

ウーゴ・ゴドイ

1. はじめに

シェイクスピアの悲劇は三百年以上前から有名である。その上、英国とアメリカだけでなく、様々な国でも有名である。人間の歴史の中で多くの本が書かれたが、世界で文化的に重要なものはごくわずかである。世界で文化的に重要な芸術には様々な特徴が必要であるが、それは大きく二つが挙げられる。一つ目は自分たちの文化の中だけでなく他文化の中でも意味があること。二つ目は本が書かれた時代だけでなく次の時代、何年後にも意味があることである。シェイクスピアの『リア王』と『マクベス』はいくつもの時代を経て世界文化のものになった。その理由は、この二つの悲劇が葛藤をテーマとしているからである。悲劇の人物は他の人物との間に生じる葛藤に頭を悩ませ、ストーリーが動いていく。その葛藤は今でも世界中に感嘆と恐怖を呼び起こす。

芥川龍之介は葛藤をテーマとし、『羅生門』と『藪の中』を作った。その二つの短編小説は異なるテーマであり、異なる葛藤を引き起こす。しかし映画を作る為に黒澤明はその二つの葛藤を組み合わせ、そして最後に自らその二つの葛藤に答えを出した。映画を作る時に元のシェイクスピアの悲劇はずっと同じではないが、元の悲劇の葛藤を保った。

2. 『乱』と『リア王』

2. 1 『リア王』の葛藤の理由

この悲劇の恐怖を起こすのは様々な理由である。まず、ゴネリルとリーガンは甘い言葉で嘘をつき、リアの世話になっていると思わず、領土支配のことだけを考えている。そのことが分かっているコーディエリアはリアに正直に話したが、リアに悪く思われ勘当された。頭の固いリアはコーディエリアの正直な言葉を信じないで、ケント伯の忠告を聞かず、甘い嘘の言葉を信じてしまった。リアは自分の思ったこと以外は聞こうとせず、最後まで自分のやり方を押し通す。その行動の結果、正直で良い人物を追放し、嘘つきの悪い人物に支配権を与えた。

エドモンドにだまされたグロスター伯は嫡子エドガーを追放し、エドモンドを信じた。グロスター伯はリアのように、悪いことをしなかった人物を追放し、嘘を使って他人をだます人物をほめて信じる。

領土権を手に入れたリーガンとゴネリルは、リアの世話をせずリアに冷たくあたる。ケント伯のおかげでリアは逃げることはできたが、リーガンとゴネリルはリアを追いつめ始めた。

リアを助けようと思っているグロスター伯は、エドモンドに裏切られてリーガンに引き渡され、目をつぶされた。エドモンドが父を裏切って次のグロスター伯になった。勘当されたエドガーは盲目になった父を見つけて最後まで世話をした。

ケント伯のおかげでリアはフランス部隊を命じるコーディエリアと会ってコーディエリアに世話された。エドモンドはリーガンへの愛を誓い、ブリテン軍の指揮権を手に入れた。そして、ゴネリルとも密かに愛を誓っていた。

コーディエリアの命じるフランス部隊はエドモンドブリテン部隊との戦に負け、リアとともに投獄された。ゴネリルはリーガンに毒を飲ませ、エドモンドからの愛の手紙をオールバニに見つけられて自殺した。オールバニはエドモンドの悪計を知ってエドガーとエドモンドを対決させる。エドガーが勝ったがその対決を行うまえにエドモンドはリアとコーディエリアを殺すように命令していた。その命令によりコーディエリアが死に、リアはコーディエリアの死体を見ながら悲しさに気が触れ、命を落とした。

アリストテレスによると悲劇の目的は心情の浄化を意味するカタルシスであり、悲劇は人々に恐怖や同情を感じさせる必要がある。『リア王』では一貫して人物達の行動ややり方などが結末の恐怖へと向かっていく。リアは頑固な考え方でゴネリルとリーガンの甘い嘘を聞き、コーディエリアとケント伯の正直な言葉を聞かず二人を追放する。甘い嘘を聞いたせいで徐々に自分の領土を奪われて、正気を失って行く。

同時に悪知恵の働くエドモンドが父と兄を騙し、人のよいエドガーを追放する。エドガーは悪い事を一度もしなかったが、エドモンドの言葉を信じて悪知恵にはまった。後にグロスター伯はリアを助けようと思った時、エドモンドに裏切られて領土を失って目が不自由になった。グロスター伯とエドガーの落ち込んだ状況は善人にも悪いことが起こるのを読者に見せ、恐怖を感じさせる。さらに、リーガンとゴネリルに愛を誓い、軍の指揮権を手に入れた。エドモンドは家族を裏切り、他の人を騙しながらより大きな力を手に入れる。その状態は恐怖の一部分であるといえる。

追放されたケント伯はリアを許し、コーディエリアの願いを聞き入れリアを助けた。そのおかげでコーディエリアはリアともう一度会うことができた。勘当されたコーディエリアはリアを許し、ゴネリルやリーガンと戦うためフランス部隊を連れてきた。しかし、エドモンドの指揮権を持つ部隊はコーディエリアの部隊に勝ってリアとコーディエリアを捕まえる。悪人が善人に勝つのはこれも恐怖の一部分であろう。最初から最後まで一度でも悪いことをしなくても、捕まえられたコーディエリアがエドモンドの命令で殺されたのはこの悲劇の恐怖の一番深いところである。

ゴネリルはリーガンを殺した後、裏切り者として見つけられ、自殺した。これは、この悲劇の心情の浄化の出現である。対決の結果、エドガーがエドモンドを殺すのは、この悲劇の「カタルシス」の完成が完成したことを意味する。

2. 2 『乱』

黒澤明の『乱』はリア王の骨格をもっているが、違う結末となる。

戦国時代で領土を維持するため、他の一族に暴力を使った秀虎は、負けた一族の相続人と自分の息子達と結婚させた。その結果、長男の太郎は楓と結婚させられ、次男の次郎は末と結婚させられた。年を取った秀虎は家長としての責任を持ち続けることに不安を覚え、領土を分け、三人の息子達に領土を維持させることを決意した。そして、三人の息子を集め、自分の考えたことを言い、毛利元就の「三本の矢」の逸話をしながら、団結を維持する限り、三人の息子は負けることはないと言った。暴力で領土を維持したのを覚えている三郎は秀虎を「ばか」と呼び、他の一族に暴力を使ったので、その団結を続けるのは無理と言った。その答えを聞いた後、秀虎は三郎を勘当し、また「秀虎は間違っている」と言った丹後を追放し、三郎と丹後の言うことに耳を貸さずに、自分の考え通りにすることにした。



白服：秀虎　黄色服：太郎　赤服：次郎　青服：三郎



三本の矢の逸話

三郎と丹後が追放されることを聞いた楓は太郎に秀虎を裏切るように説得した。その結果太郎に裏切られた秀虎は次郎の城へ行くのだが、その前に楓は手紙で太郎と同じように次郎に説得した。



楓

次郎にも裏切られた秀虎は他の城に向かった、そこで秀虎は太郎と次郎の罠に掛けられたが、秀虎と道化だけ逃げることができた。秀虎のお伴が全滅させられた後、太郎は次郎に裏切られて殺された。丹後に助けられた秀虎は自分の息子達に裏切られ、一族の中に暴力を見たことから亡霊のようにさまよった。帰るところがない秀虎は領土を歩いているところ末と会った。仏門に入った末は、秀虎に自分の一族を殺されたものの、秀虎を許すことに決めた。ここまで暴力を使ってきた秀虎は末の考え方を理解する事が出来なかった。



亡霊のようになった秀虎



末と秀虎

秀虎の一族を滅ぼすため楓は夫を殺した次郎を誘惑した。丹後は三郎に秀虎の状況を言った。秀虎を助けるために三郎は太郎と次郎の武力と戦い、次郎を殺したが、秀虎と会ってからゆっくりした生活を送る予定だった三郎は、敵に撃たれて死んだ。秀虎は三郎の死体を見て深い悲しさに沈み、命を失った。末は盲目の兄を助けようとした時、楓の家来に見つかって殺された。楓は家来から末の頭をもらって秀虎の一族が全滅した時に次郎の家来に殺害された。

2. 3 『リア王』と『乱』の比較

乱とリア王の共通点はアリストテレスの言った恐怖があることである。しかし、『リア王』ではコーディリアが死ぬのに恐怖があってもエドガーの勝ちでは心情の浄化が現れる。黒澤明の『乱』ではもっと怖い状況が現れながらも心情の浄化がない。まず、秀虎の暴力なやり方で楓という人物が生まれた。リアと同じで秀虎は事実を言う三郎と丹後を追放して決意したことを最後までやる。三郎と丹後を追放してから、楓はマクベス夫人のようなやり方で太郎と次郎を説得し、秀虎を裏切る。次郎が太郎を殺してからは次郎を操るため、楓は次郎の恋人になった。「復讐」が擬人化されたものとして秀虎の一族を全滅させるため、楓は次郎を操ってから三郎と末を殺す必要があった。

楓とはと逆に末という人物は家族が秀虎に殺されても修羅の道を歩くことなく秀虎を許した。末はこの映画の「慈悲」の擬人化されたものである。

『リア王』のコーディエリアと同じで三郎は秀虎を許してから共に暮らそうと思っていた矢先に殺された。この映画ではすべての人物が秀虎の暴力に落ち込む。その暴力のせ

いで楓は復讐を望むことになった。三郎はその暴力の事実を見せるため追放されて、後で殺された。末が仏の道に入り悪人を許しても、その暴力的といえる時代に生まれてきたため、殺された。その映画では末と三郎の「許し」と「慈悲」は楓の復讐の前で価値を失う。そして最後には同じ復讐のせいで楓は殺された。

『リア王』ではコーディリアの死ぬのに恐怖があるがエドガーの勝ちでは心情の浄化が現れるのでアリストテレスの「カタルシス」があるが『乱』では心情の浄化がなくて最後には恐怖だけ残る。

3. 『蜘蛛の巣城』と『マクベス』

3. 1 『マクベス』

『マクベス』では二つの葛藤が現れる。一つ目は魔女達が言った未来の通りにすること。二つ目は魔女達が言った未来を認めることである。戦いが勝ったマクベスとバンクォーは道に迷い、魔女達と会って自分たちの未来のことを聞いた。その日にマクベスはコーダーの領主になり、後に王になる。バンクォーは王にならないが子孫が王になる。裏切り者との戦いに勝ったため、マクベスは帰った後、コーダーの新たな領主になった。驚いたマクベスはマクベス夫人に3人の魔女が予言した未来を説明した。自分の家に夕食を食べに、王が来るのを知った時、マクベスは王を殺すことを思いついた。そこで、一つ目の葛藤が現れる。マクベスは、王と王子を殺せば新たな王になる可能性がある。あるいは王に忠実な男として裏切る事をせず、王にならない可能性である。一つ目の葛藤はどの道を選ぶかということである。どちらの道を選ぶのかを決断できないマクベスは迷っていないマクベス夫人の言葉を聞いた。そして、マクベスは王を裏切って新たな王になる道を選んだ。王子にはにげられたが王を殺した後、マクベスは新たな王になった。

しかし、王を殺したことは決して人の為になるようなことでないという気持ちがありながらも、マクベスはバンクォーとバンクォーの息子を殺す事をも考えていた。これが二つ目の葛藤である。3人の魔女は「バンクォーの子孫が王になる」と予言したが、マクベスは私欲に落ち込んで、その未来を認めず自分のためだけに動き始めた。バンクォーの子孫のことを認めない道を選んだ時から、マクベスは王としての地位を保つ為、権力を行使して暴君になった。

選択の結果、マクベスとマクベス夫人は修羅に落ち込んで、バンクォーの息子が父の復讐を果たすために多くの人を殺した。

3. 2 『蜘蛛の巣城』

『蜘蛛の巣城』では主人公が地位の高い武士であるので、この映画のストーリーはシェイクスピアの悲劇に似ているが、葛藤の理由が異なっている。北の城の主に勝った鷲津と三木が道に迷って亡霊と出会い、未来のことを聞いた。鷲津はあの日から新たな北の

城の城主になり、後に蜘蛛の巣城の城主になる。三木は主にならないが子孫が主になる。



三木 未来を言う亡霊 鷺津

鷺津が北の城の主になった後、浅茅が「現在の蜘蛛の巣城の主を殺し、次の主になれ」と言ったので、鷺津は誇り高き武士として怒った。マクベスは王を殺すことを迷っていたが、鷺津にはその迷いがなかった。浅茅はその考え方があり、鷺津に教えた。鷺津は武士として主を裏切らないことを決めたが、夕食後、浅茅が「食べ物に毒が含まれたので鷺津は主を殺すしかない」と言った。



浅茅と鷺津

主になった鷺津は三木と約束をした。三木の息子が鷺津の後継者になるということである。そのことを聞いた時浅茅は、鷺津を裏切らせるために自分が妊娠したと嘘をついた。

蜘蛛の巣城の葛藤を起こすのは浅茅である。マクベスと違って鷺津は武士として主と

三木を裏切ることを考えていなかった。そこで葛藤が現れるためマクベス夫人より浅茅は更に邪悪な人物であるといえる。マクベス夫人は迷っているマクベスに王を殺すことをすすめた後、マクベスは3人の魔女の予言した未来に進み始めた。鷺津は亡霊が言った未来を待つのを決めたが、浅茅は亡霊の言った未来に鷺津を歩かせ、さらに、主になった鷺津を騙し、三木への裏切りを起こさせた。この映画の葛藤は浅茅から始まる。浅茅は『蜘蛛の巣城』の葛藤の擬人化である。



手を洗う浅茅

4. 芥川龍之介の『藪の中』 『羅生門』 と黒澤明の『羅生門』

『羅生門』を作るために黒澤明は芥川龍之介の二つの短編小説を使った。『藪の中』と『羅生門』である。黒澤明はその二つの短編小説の葛藤を組み合わせたが、そこに描かれる葛藤は違う種類のものだった。

4. 1 芥川龍之介の『羅生門』の葛藤

天災のせいで全てを失った下人が、雨やみを羅生門の下で待っていた。下人は一生懸命働いていたが、災が起ったため全てを失った、どこにも働く所はないが生き続ける、と考えていた。下人は、階段を上がり、多くの死骸を見た。その多くの死骸の中で、死骸達の髪を抜いている老婆がいた。その汚れたことを見た時下人は腹が立った。老婆は自分を正当化するため女の死骸の髪を抜きながら、その女は悪いことをしていたと言った。老婆の言葉を聞いた後に下人は自分の葛藤を解決し、生きるため泥棒になる決意をした。最初に盗んだものは老婆の抜いていた髪である。

この短編小説の葛藤は、災の時どうやって生きるかということである。その下人は一生懸命働き、一人の主に忠実な男であったが、仕事、主、今までの生き方を失い、「羅生門」の下でこれから生きるかどうかを考えていた。一人の人間として正しくないことをせ

ずに死ぬ。あるいは生きるために、そのこだわりを捨てて泥棒になる。老婆の言葉を聞いた後、生きるのか死ぬのかの葛藤がとけ、生きる為に泥棒になった。この短編小説の葛藤は災の時、どうやって生きるのかと言う事である。

4. 2 『藪の中』

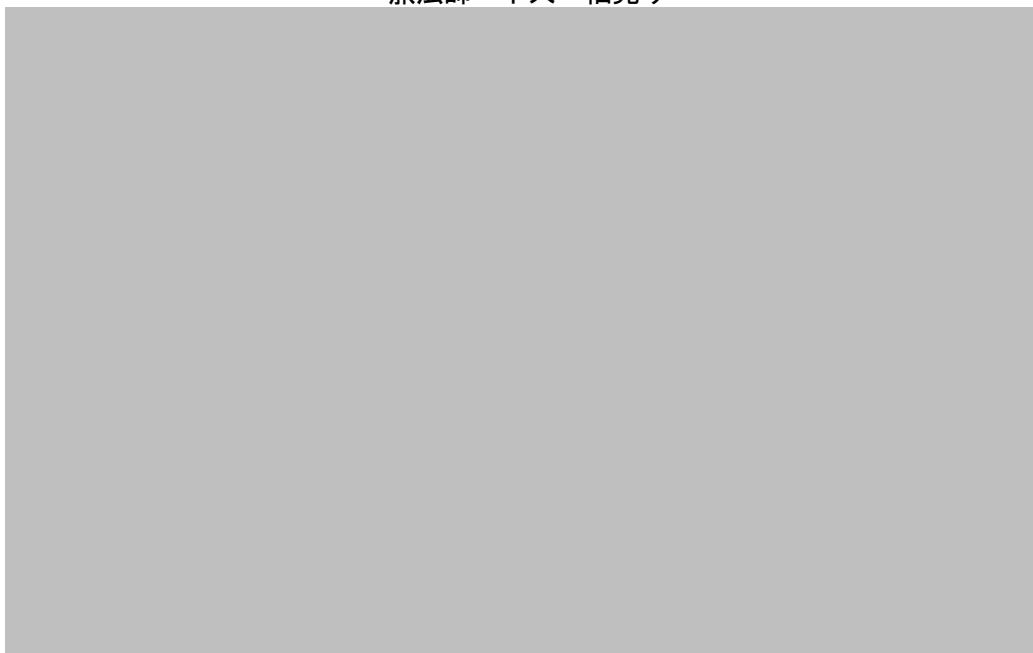
殺人の真相を知るため、官人は様々な人に尋ねたが、事実を見付けることができなかった。初めの証言者は、殺人を告発された多襄丸であり、「最初、男を殺すつもりはなかったが、女の願いで男を縄に解放し、決闘して男を殺した」と白状した。次の証言者は男の妻である。「強姦された後、夫から冷たい目で見られたので手中の小刀を使って夫を殺した」と妻は懺悔した。最後は、死んだ男の亡霊から話を聞くことになった。巫女の口から語られた死霊の物語では「妻は盗人に私を殺すようにけしかたが、盗人と妻が逃げた後、藪の中に一人残され、妻が落とした小刀を使い自殺した」と説明する。

藪の中の葛藤は、人間にとって事実は大事であろうと言う疑問である。その殺人について3人の関連者は自分を正当化するため違う「事実」を言う。その3人にとって、本当に起ったことは問題ではなく、正当化された自分の「事実」だけを語る。特に死んだ夫は、死人であるにも関わらず、他人にどのように見られるのを問題としている。3人は揃って、殺人の事実を考えずに、自分にとって都合のよい勝手な事だけを言った。

4. 3 黒澤明の『羅生門』

黒澤は芥川龍之介の『藪の中』と『羅生門』で登場する葛藤を用いて映画を作った。雨宿りのため羅生門の下に「杣売り、下人、旅法師」の3人が集まって雨が止むのを待ちながら話し始めた。

旅法師 下人 杣売り





その話は藪の中の事件のことである。その話が続けられると3人はますます人間不信になっていく。死霊であってもこの世のエゴイズムが続いているのを聞いた後、下人は柚売りの話から偽善性を読み取り、羅生門を出る。

残った2人は羅生門の下に捨てられた子供を見付けた。柚売りが子供を拾おうとした時、旅法師は「この子供を売るとは許さない」と言いながら子供を拾った。「7人の子供がいるのでもう1人がかまわない」と答えた柚売りを聞くと、旅法師はもう一度人間を信じた。

芥川の『羅生門』では人間に救い道を与えない。災の時、人間は生きるため他人を殺す、盗むなど汚れたことしかしないと伝える。

黒澤明の『羅生門』では、人間が悪事をはたらいても、死霊がこの世の無駄なことをまだ考えていても、人間が偽善的な存在であろうと、いいことが出来る人間はまだいるのでそこには救い道があると伝える。芥川の短編小説の葛藤を使って人間の悪い表を見せたが、最後には人間が悪い事をして、いい事が出来るのを提示する。

5. 日本文化を使う黒澤

ここまで見てきたのは、黒澤の映画に含まれている世界文化である。その見て取った世界文化が映画で見られる葛藤で現れる。しかし、世界文化を見せる黒澤の映画が世界文化のものだけであるのか。あるいは日本文化のものでもあるのか。

『乱』と『蜘蛛の巣城』も、映画になったシェイクスピアの悲劇でも、その二つ映画のストーリーで描かれる時代は日本の中世である。そのため、荘園の支配を握るため紛争が起きる。さらに、その二つの映画（乱、蜘蛛の巣城）が武士の世界を描いているため、

人物達は武士道の道徳心を持っていないなければならない。『蜘蛛の巣城』では、鷲津が武士道の道徳心を裏切ったので葛藤があったが、鷲津を裏切らせるため浅茅が策略を沢山使った。鷲津を騙しているため、マクベス夫人より邪悪な人物だといえる。乱では武士道の道徳心はあるが、秀虎のやり方のせいで暴力に落ち込むので両親や兄弟などを裏切る現実になった。

浅茅と楓の人物は能の人物のようであり、映画であってもその二人の人物の動き方、話し方は能のようなやり方である。

『蜘蛛の巣城』の能のような音楽が聞こえる。映画では能と同じように人物の動き方に変化があると音楽が急に変わる。能の要素が含まれているので映画が気持ちを伝えるのに効果的である。

そのため、黒澤明の映画には世界文化が含まれていても、シェイクスピアのオリジナルストーリーであっても日本文化がある。さらに、含まれている世界文化が日本文化の伝え方で表現された。黒澤明の映画は世界文化を伝えると同時に日本文化をつたえる。

6. おわりに

この研究ではシェイクスピアのオリジナルストーリーを使う黒澤明の映画は、人間の葛藤が現れ、それは世界で共通している文化である。シェイクスピアだけではなくて同じ国の作者である芥川龍之介のストーリーを使って人間の葛藤を見せながら世界文化を伝える。さらに、世界文化を伝えるため日本文化を使うので黒澤の映画は世界文化のものであると同時に日本文化のものである。

参考文献

ウィリアムシェイクスピア (2000) 『マクベス』 L&PM Pocket

ウィリアムシェイクスピア (2000) 『リア王』 L&PM Pocket

芥川龍之介 (2008) 『羅生門』 Rashoumon e outros contos, Hedra, Brasil,
Madalena Cordaro 訳

芥川龍之介 (2008) 『藪の中』 Rashoumon e outros contos, Edra, Brasil,
Madalena Cordaro 訳

黒澤明 『羅生門』、1950年

黒澤明 『蜘蛛の巣城』、1957年

黒澤明 『乱』、1985年

HINDLE, Maurice. Studying Shakespeare on Film. New York: Palgrave, MacMillan,
2007

Miranda, Celia Arns de. Um olhar oriental sobre Shakespeare: Trono manchado de sangue de Akira Kurosawa. 2009